

ど

うせ食べるのならうまいものを食べたい。とMさんは言う。これだけ切り取ってしまえば、あれだってそうだろう、で終わってしまうのだが、Mさんのそれには彼女がなめてきた辛酸が乗っかっている。Mさんの畑仕事を手伝い、ぼくの畑仕事を手伝ってもらっている間、おしゃべり好きのMさんは話が止まらない。ん、そんな話は音量下げた方が、とハラハラするときもあるが、本人はおかまいなしだ。昔食べていたもの話になると特に勢いづく。それはそうだろう。中海はかつて音に聞こえた食材の宝庫だったのだから。赤貝は中海のものに限る、など小学生のぼくでさえ知っていた。

うなぎ、えび、かに、魚、貝、それに山のものも加えて、今となつてはどれほど金を積んでも手に入らぬ品々を毎日たらふく食べていたのだ。ある時まで。

昭和三十八年国の事業として宍道湖・中海淡水化事業開始。昭和四十九年海水の遡上を止める中浦水門竣工。平成十四年淡水化事業中止。平成二十一年水門の撤去完了。

「一度変えた環境は、そう簡単には戻らんわね。」
淡水化事業だけが、中海を変えてしまったわけではないのかもしれないが、消えてしまった海の生き物たちがいつか戻ってくるにしても、Mさんもぼくも生き

ているうちにそれを目にするのではないだろう。

過去形で語るしかないのだけれど、長く特上の物ばかり口にしてきた体験は、困難を耐え忍ばねばならなかったときのMさんを支えた。うまいものを食べて生きていけばいい。元気で働けるのも、命さえあればどうにかなるという樂觀が消えないのも、自分の血や肉を作っているうまいもののおかげだ。

「そう思ったらね、食べることが自分の中心になつた。」

うまいものイコール高い物、ではない。たとえば播種、施肥、収穫のタイミングを計り、化成肥料に頼らず、丹念に土を作つて育てる野菜。

「うちの野菜は、みんながおいしいおいしいって言うてくれる。」

どうせ食べるのならうまいものを食べたいし食べさせたい。だから、惜しげもなくだれにでも分け与える。ぼくも行く度にどつきりといただく。畑も無料で貸して、どうすればおいしくなるかを説く。間違つたら小言も言う。料理も研究熱心だ。おいしくするのに金を惜しまない。というより、よくなるのなら金額は関係ない。

暮らしが楽しくなるコツつてこういうことかもしれない、とMさんを見ていて思う。

専業ババ奮闘記 (その2) 115

木幡智恵美

秋 (4)

秋分の日、娘たち母子と出雲の家(寛大曰く、誰も住んでいないお家)で落ち合うことにし、早朝から弁当作りに精を出した。夫と私は先に出て畑仕事をし、それが終わった頃に娘たちが来ることになっている。夜中には雷が鳴り、六時半に家を出る頃はまだ雨は降っていた。農道の途中では土砂降り。どうなるかと思つたら、出雲に入ると雨は上がっていた。

作業服に着替え、まずはカボス畑に行つてナスとピーマンの収穫、次にゴンド畑に車を寄せると、キジの雛が四羽あわわて逃げて行くところだった。夫は刈り払機で草を刈り、私はダイコンの周りにぎつしり生えたカヤツリグサを根っこから引き抜いていく。帰つてシャワーをして着替え、食器などを準備して娘たちを待った。

娘たちがやつて来たのは十時半。車中で眠ってしまったという宗矢を起こして、まずは実家の墓参り。孫たちにとつては曾祖父父母の眠る墓だ。雨が上がり、秋晴れとなつたので、次に参る父の実家まで歩いて行くことにした。寛大は虫捕り籠と網を持って虫を探しながら、実歩は水筒を肩に提げて私と手をつないで歩く。娘と一緒に歩く宗矢はというと、「あつ」と言つては立ち止まつて草を指さし、少し歩くと「あつ」と言つて石ころを指さし、なかなか進まない。夫ときたら、脊柱管狭窄症のため、少し歩くと腰かけるところを見つけて座っている。一キロほどの行程にどれだけ時間をかけたことか。

着くと、庭に居た従兄が、「菜理子さん、いつの間にか、三児の母かね」と驚いた顔で迎えてくれた。「智恵美さんがおばちゃんとはね」とも。家の中には私と実歩だけ上がり、代表して線香をあげ、他の皆は従兄に連れられ果樹園の見学。従兄は元々好きな魚釣りに加え、果樹栽培にも熱を入れてる。今の時季実るのは、クリとブドウ。母子が見学している間に、栗の木が並ぶ近くの墓に夫とお参りする。クリ、マスカット、ピオーネをお土産にいただき、家の近くまで来たところで、実歩の肩に水筒がないことに気づいた。水筒を取りに踵を返す。従兄の家の仏間に赤いものが見えた。汗だくで家に帰ると、縁側からがテーブルの周りを囲む孫たちが見えた。秋空の下を歩いた後、皆でにぎやかに食べる弁当の美味しかったこと。

30代フリーター やあ、ジイさん。入管収容施設で亡くなったカメルーン人男性をめぐる訴訟の判決で水戸地裁が、入管職員には救急搬送を要請すべき義務があったのに怠ったとして、国に165万円の損害賠償を支払うよう命じた。男性は「死にそうだ」とうめき声をあげていたという。なぜ入管はこんなに冷酷なんだ。

年金生活者 国家と国家の関係を上下の関係としてしか扱えない前近代的な「帝国」の原理が背後にある。

全国の入管施設では2007年以降、17人の外国人が病気や自殺で死亡している（9月17日朝日新聞朝刊）。昨年3月に亡くなったスリランカ人女性のケースをはじめ、国の責任を問う複数の訴訟が提起されている。

長いあいだ「帝国」としての中国の「服属国」だった日本は明治維新を境に、逆に自らが「帝国」となって中国を「服属国」化しようとした。しかし、別の「帝国」であるアメリカに阻まれ、戦後はその「服属国」となっ

属国」としての恐怖心と言っている。

日米両国は形の上では対等な主権国家として軍事同盟を結んでいる。しかし、実態は国家間には上下の差を設ける「帝国」と「服属国」の関係にある。

「主権国家」がそれぞれ自らの足で立つ存在という建前をとっているのに対し、「帝国」は「服属国」をつかえ棒にし、「服属国」は「帝国」を寄るべき大樹にするという相互依存的な関係を結んでいる。「帝国」はつかえ棒を失うのを恐れ、「服属国」は大樹の陰から追い出されるのを恐れる。

大樹にすっぽり覆われていないと存立が危うくなると考えているのが今の日本政府だ。対等な主権国家どうしの同盟なら、条約に書いてあることだけを順守すればいいはずなのに、あらゆることで「帝国」に従順に振る舞わないと大樹の下から締め出されるのではないかという不安と恐怖に常に囚われている。

30代 その囚われから脱する道はあるのか。

た。つまり、国家と国家の関係を常に上下関係として扱い、対等な「主権国家」どうしの関係としてとらえる経験が一度もしていない。その経験の欠落が入国管理の現場で集中的にあらわになっている。

30代 なぜ「帝国」の原理が、基本的人権の尊重をうたう新憲法のもとでも残っているんだ。

年金 国家は単に共同体の規模が大きくなってできたものではない。ひとつの共同体がもうひとつの共同体を支配したときに成立する。共同体のあいだに上下の結びつきができたとき国家は発生した。柄谷行人は「国家は他の国家に対して存在する」ことを強調する（『世界共和国へ』）。それは成立した国家にだけ言えるのではない。国家の成立過程そのものが「他に対して存在する」過程をなしている。共同体が他の共同体に対して上下の関係として存在するようになったとき、国家は成立する。やがて世界の諸国家が「帝国」か、その「服属国」かのいずれか

年金 民主党の鳩山政権が、普天間基地の移設先を「最低でも県外」と公約しながら、実行できなかったのは、「服属国」としての不安と恐怖に駆られた霞が関の官僚たちが激しく抵抗したからだ。辺野古移設の工事を止めさせるには、対米関係を「帝国」と「服属国」との関係ではなく、「主権国家」どうしの対等な関係として扱う確固とした理念を政府に持たせることが

に属することになったのは必然と言える。

17世紀の欧州諸国は長い宗教戦争を終わらせるために、国家間の関係を対等な「主権国家」どうしの関係に組み替えるウェストフアリア条約を結んだ。「帝国」は解体され、初めて上下の関係ではない国家間の関係が成立した。しかし、地球上の大半の国家は同様の経験をしていない。中国やロシア、アメリカなどの大国が「帝国」の原理を行動の物差しにし、日本を含め多くの国が大なり小なりそれに従っている。

30代 入管を見ると今の日本も「帝国」に見える。

年金 沖縄県知事選で米軍普天間基地の辺野古移設に反対する玉城デニーが再選されたことについて内閣官房長官は「辺野古移設が唯一の解決策」という政府の決まり文句を繰り返した。それはアメリカに見捨てられたくないという恐怖心が言わせる呪文のように聞こえた。アメリカという「帝国」の「服

最低でも必要な条件となる。

アメリカは冷戦後もNATOや日米同盟によって西側諸国を束ねる「帝国」としての地位を失わなかった。しかし、ヨーロッパ諸国は日本ほど「帝国」に従順ではない。沖縄県の調査では、米軍に対してドイツ・イタリア・ベルギー・イギリスの4カ国が国内法を「原則適用」しているのに、日本は「原則不適用」だ。

この違いは先に触れたウェストフアリア条約に起源がある。国家間の関係を上下関係として扱う「帝国」に代わって、対等な関係にある「主権国家」群が世界を構成するという原則がそこで打ち立てられた。

私たちの国は戦後「主権国家」としての体裁を整えた。だが、それは自らの意思で選び取ったものではなく、アメリカに新しい憲法を押しつけられた結果だ。敗戦までの「帝国」の残滓を入管などに温存しながら、米「帝国」の「服属国」として現在に至っている。

ニュース日記 847
中村 礼治

「帝国」の原理